
背中にべったりと張り付いた

朱人

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

背中にべったりと張り付いた

【Nコード】

N5641D

【作者名】

朱人

【あらすじ】

主人公、大淵霞のうなじには、何かアメーバ状の物体が張り付いていて、彼に良く話しかけた。そのことに、周囲の人間は気がついていない。そんな彼が高校でいじめられることになり……。

背中にべったりと張り付いた

第一話：孤独

僕には生きてゆく上で必要な、決定的な何かが足りないのだと気がついた。何かが足りないまま生きていかなければならないと思うと、とてつもない絶望感に襲われるのだった。

僕の名前は^{おおぶちかすむ}大淵霞。いま、高校二年生、青春真っ盛りのはずが、どうも漫画や小説に出てくるような甘酸っぱい青春とやらは味わえていない。何かが、何かが足りていないから。

多分そうして何か足りない分を補うために、僕のうなじにはこんなにやく色をした物体が張り付いているのだと思う。その物体はねばねばしていて不定型だ。そのため、手でこそぎとろうとしても、絶対に剥がすことはできない。

しかもこいつは、他人には見えない。だから僕はいつもうなじに違和感を感じながら生きているのだけれど、誰に相談することもできない。学校の授業でも、親も、テレビでも、一度もこの物体のことを聞いたことはなかった。だからこれは僕に特殊なことなのだ。中学生ぐらいの時にようやく気がついた。このアメーバのようなものがくっ付いていやがるおかげで、僕は人とはどこか違う、何か足りない人間になってしまったのだと、今は思っている。

物体は、時々私に喋りかけてくることがあった。たとえば小学生の頃、ダンスの引き出しを開けて朝来てゆく服を選ぼうとしているときに、こいつは口を開くのだ。

「お前、そんな服を着て行っちゃだめだ。そんな服を着てゆくと、お前、今日死ぬぞ」

その声を聞いて私は震え上がった。

「縁起と言言葉を知っているか。何か事物の目に見えない原因のことだ。その服を着ていることが原因となって、お前は死ぬことになるぞ」

たとえば、長いマフラーを首に巻いたままバイクに乗っていた人

が、そのマフラーがタイヤに巻き込まれて首が締めまり、死んでしまった、と言う話を当時私は聞いたことがあった。だから、着ていく服の種類によつて、今日の運命が決まるの言うのは、あり得ることだと思つた。それで私は、アメーバ状物体が「その服なら大丈夫だ」と言つまで、服を何度も何度も選び直さなければならなかつた。

また、こういうこともあつた。それは中学生の時のことなのだが、うなじに付いたそいつも私の成長に合わせて大きくなり、おしゃべりの量も多くなつていた。

「お前、道を歩いているとき、影になつている部分だけを踏んで歩かなきゃだめだ。光の当たつている部分を踏むと、お前も膜下出血で死ぬぞ」

やつも頭がよくなつたのか、具体的な病名を出してくるようになった。私はむろん、くも膜下出血で死にたくはなかつたから、道にできている日向の部分は踏まずに、影の部分だけを踏んで、毎日学校に登校した。それはとても疲れる作業だつた。

そつやつつていつも僕に話しかけてくれたおかげで、僕には人間の友達が一人もいなかつた。

高校にはいると、僕はいじめられた。それはしょうがないと思う、何せ僕には何か足りないのだから、そして人にはない何かを持っているのだから。それが才能と呼ばれるものならばよかつたのだけれど、残念ながらそれはうなじに張り付いている変な物体でしかなかつた。だが、そいつは最近僕のことを励ましてくるようになった。「お前は、世界を変えることのできる力を持つものだ」とか、

「お前には破壊神の素養がある。お前に友達ができないのは、お前に近づいたものはすべて、お前のもたらず大帰滅に巻き込まれることになるのを本能で悟っているからだ」

大帰滅とは、ヒンドゥー教のシバ神がもたらすという、すべてを無に返す世界の終末のことだ。アメーバ状物体は引き続いてこうい

った。

「いいか。お前には何かを生み出す力はない。多くの人がそうであるように人間関係の輪を築いてそこで生きてゆくこともできないし、芸術家のように孤独の内でも何かを生み出すこともできない。ただ、お前は既存の秩序を壊すことのできる人間だ。歪みや垢などではぼろになった組織を壊すことができるし、規範でがんじがらめになった共同体の意識を破壊することもできる」

今までさんざん人生を妨害してくれた忌々しい物体が、打って変わったように私を褒め称えた。

「ただ、それはお前にとってあまりにも苦しい人生でもある。破壊神は、自らも崩れ落ちることによってしか、世界を変えられないからだ」

高校は僕にとっては地獄だった。朝起きると、胃がずきりと痛んだ。両親には、僕がいじめられていることは一言も言っていない。そんなことを言っても何の解決にもならないことはわかりきっているからだ。大人は、何も分かってはくれない。

「じゃあ、行ってくる」

「気をつけてね」

僕はいつもの挨拶を交わすと、学校へ向かった。

五十メートルはあるかと思われる坂を登り切ると、そこが学校である。下駄箱の中に僕の上履きはない。朝登校すると毎日のように上履きののりが塗りがたくられていたために、家に持って帰ることにしたのだ。

僕は靴の中から上履きを取り出すと、簀の子の上に無造作に放り出し、履いた。

教室はざわついていた。みんなが気のあった友人同士、思い思いにグループを作って話しているのだ。しかし、僕には帰着すべきグ

ループなどなかった。多分、あいつが言うように、僕には破壊神としての素養があるから、誰も寄りつかないのだ。

僕が自分の席に向かうと、クラスの後ろの方で立って話していた不良グループが近寄ってきた。奥村、野沢、大谷ら主要メンバーを含んだ五人組だ。

奥村が僕の机を蹴り飛ばした。

「おらっ、教室にのそのそ入ってきたかと思えば、朝の挨拶もなしか！？ えっ！」

奥村は僕の耳元で大声を張り上げた。鼓膜が限界まで震える。

奥村は、不良グループのリーダー的な存在だ。人望があり、運動神経は抜群、潜在的な頭の良さも持っていた。僕とは対極に位置する存在、何かを生み出すことのできる人間だ。そんな才能に恵まれた彼が、なぜか僕をいじめるのだ。

「ボーツとしゃがつて。聞こえねえのか！！ おらっ、朝の挨拶だよ」

「だめですよ、奥村さん。こいつ足りないから。反応が鈍いんだ、ひゃっひゃっひゃ」

そうやって下劣な笑い声をたてたのが、グループに中で一番下っ端の、大谷という男だ。

「……」

僕は、屈辱と恐怖で涙が出そうだった。

「ほらっ、さっさと挨拶」

グループの中では一番優等生、先生にはいつもほめられている野沢が言った。僕に仕掛けられる罠のほとんどは、彼が考えていると言っても過言ではない。

「ご、ごめんなさい。おはようございます」

僕は震える声でやっとそういった。

「あん？ 聞こえねえな」

……破壊神たる僕に、なんたる傍若無人の振る舞いか、そう言いたかったが、言えば何をされるか分からない。

「み、みなさん。おはようございます」

「言ったとたん、奥村の拳があごに飛んできた。」

「おせえんだよ！」

僕は跳ね飛ばされて、床に倒れ込む。そこに、五人全員がけりを集中させてくる。僕はまるでサンドバツクだ。

ようやくけりが収まると、奥村が言った。

「こいつ抵抗しないのな。こんな理不尽な目に遭ってるのに」

「元々卑屈な性格なんだろ。馬鹿と卑屈は一生直らないってね」

そう言ったのは大谷だ。

彼らはこうして毎日、僕に攻撃の嵐を浴びせる。朝、ホームルームで先生がきたときには、気がつかれないように。

彼らは気が済むと、去っていった。

僕はなぜこんな目に遭うんだろう。

そうすると、今や背中からおしりのあたりまでに成長したアメーバ状物体が言った。

「それはお前が破壊神だからだ。彼らは皆お前のことを恐れているんだ」

そうだ、僕は破壊神だ。

学校という建物は、今やうまく機能せず、ゆがんでいる。いじめ、登校拒否、学級崩壊、皆原因は、人間を柱にして建っている学校という構造物がどうしようもなくねじ曲がっているからだ。ゆがんだまま建っている建造物を直すには、一度破壊して、更地にしなければならぬのだ。

その、破壊神としての役割を、僕は背負わされているのだ。奥村たちはそれを本能的に感じ取っている。

僕は、自分の背中全体に広まったアメーバ状物体が、今度は額のあたりにまで進出してきていることに気がついて、ひやりとした。最近、成長のスピードが速い。

第二話：彼は何のためにしているのか

僕は家に帰ると自分の部屋に閉じこもった。扉を閉め、錠戸を閉じ、耳栓をして、電気もつけずに一人部屋の中でじつと座っている。毎日数時間でも、外界から入ってくる情報を遮断してしまわなくては、気が狂ってしまいそうだった。

僕とアミーバ状物体は二人きりになる。

「こんな醜い世界など破壊してしまえ。それがお前に与えられた、唯一の死命なのだ」

彼はいつになく強い口調で僕にそう言ってくる。

「そんなことを言われても。どうやって壊せと言っただい？」

「何もお前が意識しないでも、お前は破壊神としての作用を周囲に及ぼしている。風が吹けば桶屋が儲かる、というのは、一つの真理を表しているのだ。お前の一挙手一投足が、意図せずに、世界を壊している。今、現にお前の通っている学校は自らの持つひずみに耐えられずに崩れ去ろうとしているではないか。まもなくだ、まもなく学校中に嵐が吹き荒れる。世界を震撼させる嵐が」

「世界を震撼させる。それを僕が引き起こすというのか」

アミーバ状物体はぶるりとふるえた。僕の尾てい骨からうなじにかけて、悪寒が伝わった。

「それは……、私にもまだ見えぬ。だが、そのとき、お前の中に欠けている何か、満たされるだろう」

嘘だ、と僕は思ったが、彼には伝えなかった。僕の中に欠けている何かは、たとえ地球の磁場が逆転しようとも、満たされる種類のものではないのだ。それはいわば、遺伝子上の欠陥と同じ問題なのだ。

アミーバ状物体はまるでお祭りの時のお囃子のようにリズムカルに喋り続ける。

「この学校でお前が引き起こすことは、テレビなどのメディアを通

して、あるいは生徒や教師の持つ横のつながりによって、いずれ日本全国に飛び火する。お前が引き起こすことは、政治家や、科学者や、労働者の認識を新たにさせる。彼らは自らがその上にあぐらをかいてきた欺瞞に気がつく。お前にはそれだけのことが成し遂げられるのだ！」

彼はあたかも予言者のようにそう言った。

「君には未来が見えるんだな？　ずっと昔から、君は未来を見通してきた。その助けを借りて、僕はここにいるんだな」

こいつがうなじにくっついてたおかげで、僕は、周囲の人間が何の苦もなく持つているものを、どれだけほしいと熱望しても、得ることができなかつた。その欠乏のためにずっと苦しんできた。だが、今ようやくこいつが背中にくっついてた意味が分かつた。こいつは僕にとつて、見えない未来を見通すレンズのような役割を果たしてくれていたんだ。

「ありがとう。僕は今まで、君の存在を疎んでいた。だけど君は、僕にとつてなくてはならない存在のようだ」

「やっと私の存在の価値が分かつたか」

アメーバ状物体はまた少し成長したようだった。それは私の目元からおしりの全体まで覆い隠した。

翌朝僕は、アメーバ状物体と会話をしながら登校した。

「おい、あいつ一人でなんかぶつぶつ言ってるぞ。大丈夫か？」

そんなことをひそひそ話す輩もいた。うるさい、僕はお前たちには見えない、崇高な存在と対話しているんだ。

教室にはいると、いつものように奥村たちが集まってきた。僕のハッピーな気分は一気に吹き飛ぶ。

「おい、朝の挨拶は？」

「い、今しようと思っていたところですよ」

僕は下を向いてぼそぼそ言う。それが奴らをより増長させることに気付いていながら。

「あん！？ だったらさっさとしろよ！」

「お、おはようございます、皆さん」

僕はまた殴られるという恐怖から、彼らの顔を見ることもできない。

「どうします？ 奥村さん。今朝のこいつの態度。いつものように殴るだけじゃすまされないんじゃないやありませんか」

大谷が上目遣いにそう言った。

「ふん。まあいいさ。俺は寛大だ。許してやるよ。ただな」

奥村は野沢に目配せした。こいつら何かを企んでいる。

「おまえ、今日のトイレに来いよな。大事なお話があるからさ」と野沢。

「もしこなかったら、どうなるか分かっているだろうな？」

僕の胃はきりきりと痛み始めた。いったい彼らは今度はどんな理不尽な仕打ちを僕にくるつもりなのだろう。

アメーバ状物体が口を開く。

「お前は破壊神だ。学校という、いや日本という、世界の人類社会というゆがんだ建物を壊すためにお前は生まれてきたのだ」

「そんなこと言ったって、ちっとも破壊神としての作用を發揮しないじゃないか？ 破壊神なら、あいつらなんて一ひねりだろ」

「勘違いするな。破壊神とは力あるものことではない。力は創造という破壊とは対局の対極の概念に結びつく。破壊神は、力を行使するのではなく、その向きを変えてやるのだ。そのことによっては、危うい力のバランスに支えられていた学校社会という構造物は一気に解体するのだ」

僕にはアメーバ状物体が何を言っているのかさっぱり分からなかった。

「つまり、僕には奴らに勝てるだけの力が全然与えられていないってことなのかい？」

「ちがう。もはや勝つ勝たないが無意味となるように、すべてを解体する力がお前にはある。ただ、まだその時がきていないだけだ」

「その時はいつやってくるんだ？」

「もうまもなく。数日中には……」

アミーバ状物体は僕の体の半分以上を飲み込むまでに成長していた。最初気がついたときは、うなじの部分だけに張り付いている程度だったのに、今や人一人分の質量があるんじゃないかなるか。重さは感じない、ただ、全身に何かかへばりついていてという違和感が恐ろしいまになっている。

「君は何のために、僕の背中に張り付いたんだい？」

「破壊神たるお前を助けるためにさ。小さい頃から、お前が破壊神の力を発揮する前にのたれ死にしないよう、ずっと見守ってきたのだ。それはお前も分かっているはずだ」

「僕は運命の子だというのかい？」

「そうだ。端的に表現してしまえば、お前は運命の子だ」

僕は授業中ずっとアミーバ状物体と会話をしていた。テレパシーみたいに声には出さず、頭の中だけで。もはやこれは、授業などを聞いている場合ではない。僕は今や、破壊神たることを自覚した。後はどうやって、破壊の作用を現実のものにしていくかだ。アミーバ状物体は、僕が意図せずして破壊の作用を持っていると言ったが、今や自分自身の意志で駒を進めるときがきたのである。

頭の中で、脳内物質がすごい勢いで分泌されているのが分かる。まるで花火だ、脳内で打ち上げ花火だ。これも、いよいよ僕がまたらす終末が近い、と言うことの現れだろう。

放課後がきた。確か奥村たちとの約束があった。僕が破壊神とも知らずに、彼らは僕に関わろうとしてくる。それが何をもちたらずか、今から楽しみだ。多分、僕が原因で奥村たちの人間関係のバランスが崩れるのだろう。それが原因となって、今度はクラスの間人間関係が、そして学校全体の人間関係が、連鎖反応のように崩壊する。ふはははは……ハッハッハ……我こそは破壊神なり。

そう考えると、一番最初に生け贄にされるであろう奥村たちが哀

れになってきた。僕は心優しき破壊神だから。しかし、今や歯車は回り出してしまった。ここから起こることはすべて必然なのだ。えらく長い学校の廊下を歩いて、僕は奥村が指定したトイレにたどり着いた。

彼らは僕より先にトイレの中で待っていた。

僕はにやりと不敵に笑った。奥村たちは不審そうに、お互い顔を見合わせた。

ようやく僕が、運命の子供であると言うことに感づき始めたのかな？

「おい、こいつ何笑ってた。これから楽しいことでも始まると思ってるのかな」

そう言ったのは野沢だ。彼は頭がいいが、特殊な感覚は鈍いらしい。まだ僕が何者なのか気がついていない。

「気でも狂ったか。まさかな……。」

奥村がぼそりと言う。気が狂っただと、破壊神に向かって何を無礼な！

「さつさと用件を言ってもらおうか」

私は胸を張ってそう言う。

「は？何を偉そうに？」

突然、奥村が僕を殴った。僕の体は個室のドアにぶつかって、倒れた。鼻からどぼどぼと赤い液体が垂れる。

「うぶひい。ご、ごめんなさい」

怖い怖い怖い、奥村は怖い、人間が怖い、みんな怖い。先ほどまでの全能感が、その一発でかき消えた。

「なーにさつきから訳のわかんないことブツブツつぶやいてんだよ。これで目が覚めたか？」

「は、はい。で……ご用件は何でございましょうか」

ここは怒らせない方がいい。下手に出て、穏便に事を済ませるのが一番だ。そうだよ、いずれ僕がすべてを壊すんだから。

「金をよ。貸させてこと」

「え」

僕の目の前は一瞬真っ白になった。

「お小遣い、頂戴ってこと」

え、これはもしかして、かつ上げてやつじゃなかるうか？ いかんいかんいかん、そんなのはねえ、君たち、犯罪だよ。そのど元まで声が出かかって、やめる。また殴られちゃうから……。僕はようやく起き上がって、何とか事態を飲み込んだ。

そつだ、お金だ。お金を渡しちゃうおうか？ でも、一回こついうことをしちゃうと、つけあがってどんどん要求されるっていうからな。

僕が迷っていると、野沢が口を開いた。

「おつと。今すぐってことじゃないよ。君、僕たちの要求する金額をすぐ払えるとは思えないからね。明日」

まさかまさか、こんなことになるなんて。

「五万円。明日学校にもってこいや。引き渡し場所は四階のトイレな。昼休みに、俺たち待ってるから」

「もし持ってこなかったら、どうなるか分かっているだろうな？

ね、奥村さん」

そつ言ったのは大谷。

僕が黙っていると、野沢が僕のほおをひっぱたいた。

「おい。返事は？」

「……」

「もう一度殴りたいのか？ え」

と奥村。

「ひい。すすす、すいません。分かりました、明日までに五万円持ってきます、必ず、耳をそろえて、はい、持ってきます」

彼らが消えた後で、トイレに何度も何度も吐いた。吐瀉物に、鼻から出た血が混じる。

どうしよう、もう明日学校を休むしかないよ。

背中にべったりと張り付いた

このとき、アメーバ状物体は全く気配をひそめて、何も声をかけてこなかった。

僕は、絶望的な気分で家に帰った。

第三話：破壊神

翌朝、僕は本当に気分が悪くて学校に登校しなくなっただけ
れど、両親はがんばって行きなさいと言った。別に風邪をひいてい
るわけでも何でもなく、心因性の原因であつたから、休む理由には
ならなかった。

学校に行きたくないなんて、何かあつたのかと両親は聞いてきた
が、本当のことをいえるわけがない。彼らの前だけでは、僕は強い
子でいたかつた。

五万円は用意できなかった。学校で僕は殴られるだろう。

昨日放課後からずっと気配を消していた、アメーバ状物体が喋り
だした。

「時は来たれり」

「時は来たれりって、何の時だよ？」

「お前が果たすべき死命が、ついに今日行われるのだ」

「僕が、今日事を起こすってことかい？」

「そう、お前こそは破壊神。そのことを忘れるな」

そうだ、僕こそは破壊神だ。何も恐れることはない。どうせみん
な壊れてしまうのだから。

人類社会の基本的な構造は、有史以来いまだ一度も壊されたこと
がない！ところが、その構造が、昨今の文明の発達についてこれ
ていないのだ。それで生じた歪みが、結局学校という社会の縮図に、
大きな不幸をもたらしているのだ。僕はその哀れな犠牲者だ。しか
し、今や僕は覚醒した。そのひずみを瓦解させる事件を引き起こす
力が、僕にはあるのだ！

「そうだ。お前は破壊神だ！」

僕は学校に登校した。最初、不良グループはいつものように絡ん
ではこず、ただ遠巻きにちらりと見てきただけだった。僕は奥村を
にらみ返してやった。僕は破壊神。何で彼らを恐れる必要があるう

か。

ところが奥村は席を立って、僕のところに単身乗り込んできた。ふ、ふん。たいした度胸だ。いや、まだ僕が破壊神だと言うことに気がついていないのか。

「おまえ。今日のこと、忘れていないだろうな」

「は、はい。忘れておりません……」

この野郎、下手に出てあげられるのもい、今のうちだと思え。

「じゃあ、四階のトイレな」

「……は、はい。かしこまってそうらえかし」

ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう！ 僕が破壊神としての作用を發揮するのはいつなんだ？

「奴らの要求通り、放課後四階のトイレに行け」と、アメーバ状物体。

「で、でも……。僕五万円持ってないよ」

「いいのじゃ。そこでまさに、お前は、破壊神としての作用を發揮するのだから」

「ほ、本当かい？」

「ほ、ほ、ほんとのほんと、本当さ」

物体はリズムカルにそう言った。僕の体は、胸も、腹も、生殖器も、足も、何もかも成長した物体に覆い尽くされていた。かろうじて顔だけが外気に触れているだけである。こんなになっているのに誰も気がつかないなんて、やっぱりこいつの存在は、僕の幻覚なんだろうか？

放課後、僕は命令されたとおりに、四階のトイレに行った。

換気のためだろうか、トイレの壁に面した窓ガラスはあいていて、とても冷たい風が吹き込んでくる。奥村たちは僕より遅れてやってきた。

「おい、五万円。さっさと出せよ！」

お前は破壊神だ。お前は破壊神だ。崇高なお前が、奴ら下郎の要

求を受け入れる必要はない。

「ご、五万円はない」

「あん？ 何だって」

アメーバ状物体はついに、僕の顔まで飲み込んだ。もはや全身、それに覆われていないところはなかった。

私は破壊神だ。私は破壊神だ。お前らごとき破壊してやる。

「私の命令を聞け、破壊神大淵霞よ。奴を、その開いている窓から突き落とせ。それが、破壊の第一歩だ」

今や僕には、自分の声とアメーバ状物体の声との区別が付かなくなっていた。

「お前、何ぶつぶついつてんだ？ 五万円持ってきてないのか？

それじゃあ、仕方ないな。制裁だ！」

私は破壊神。

私は、奥村にまつすぐつつこんで、当て身を食らわせた。

油断していたのか、奥村はあっさりと窓際まで吹き飛ぶ。

「な、何を……」

奥村はあがく。私は奥村の顔を押さえて、窓の外へと突き出す。さらに力を込める。

「う、うわああああ」

奥村の体は、ゆっくりと校舎の外側へ落下した。ぐしゃりと、つぶれる音がした。

私は奥村たちの取り巻きを突き飛ばすと、廊下を駆け抜け、校舎の外に出た。

私は大淵の背中に張り付いていたアメーバ状物体。

ついに彼の精神を占拠することに成功した。

大淵歩の自我は完全に消滅した。

私こそが破壊神。

これからは、もう好き放題できる。ふはは、ふはははは……。

背中にべったりと張り付いた

精神錯乱を起こした高校生大淵霞が、同級生を突き落とした容疑で逮捕されたのは、その日のことだった。

背中にべったりと張り付いた

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5641d/>

背中にべったりと張り付いた

2008年11月7日08時21分発行